

バイ・  
ザ・ウェイ

text by Haruko Ohta  
illustration by Yasuko Yamada

# 蛍の道

作家  
太田治子

昨年の夏のある朝、会社員になつてまもない娘の万里子が玄関先で靴をはきながらこういった。

「ママ、今晚時間があったら、中山まででてこない？ 蛍がみられるの」

突然の話だった。しかし、どうしてもいきたいと思った。半世紀以上も生きてきて、まだ数回しか蛍のとぶところをみたことがない。蛍とは縁のない町での生活が、続いていた。

JR横浜線中山駅の改札口で午後

とすれ違った。だれもが小声ひとつ立てることなく、蛍が光るのを待っていた。

「あつ、光った！」

突然、小さな子供が声を上げた。みると、川べりの木の上に一筋、二筋、蛍の光がちらちらと光っていた。川べりだけでなく、木の上でも光るという当り前のことに、この時私は初めて気付いたのだった。更に、とびながら光のリボンをなびかせている蛍もいた。数は決して多くなかったけれど、どの蛍も到って元気をうにみえた。その光は、とても明るく感じられたのである。

帰りに、中山駅近くのイタリアンで、万里子と乾杯した。

「万里子ちゃん、ありがとう。蛍があんなに可愛いものだとは思わなかったわ」

そういうと、

七時に待ち合わせることにした。小

田急沿線のが家からは、町田経由でおよそ四十分かかる。万里子の勤め先は藤沢なので、中山まではもつと遠い。それでも、先週中山に住む友人に誘われて蛍をみて、どうしても今度は母親をつれてきたくなったという。娘に案内されて、駅から三十分近く歩くと、蛍のいる公園に着いた。公園の中は、あくまでしんとしていた。細い川に沿って薄暗い小道を歩いていると、時々家族づれ

「それはよかった。ところで、ママが初めて蛍をみたのはいつ？」

はるか遠い二十代初めのころの夏と、丁度同じ年頃のことである。有楽町の大叔父の事務所に勤めだしてまもなくだった私は、夕方山手線のある駅で母と待ち合わせをした。そこから、母と歩いて、蛍の放し飼いで有名なホテルへ向った。ホテルの庭は、小雨で煙っていた。茂みの中に、やっとホテルが光っているのを見つけた。それは、実にさびしい光り方だった。まるで、今の自分のようだと思った。妻子ある男性と初めて食事をしたことを、母に黙っていた。このまま、お付き合いすることが怖かった。もう食事のお誘いをお断りしようと、その力のない光をみつめながら心に決めた。

今、目の前でイタリアワインをおいしそうに飲み干す万里子の笑顔には、一転のかげりもなかった。私の心も、いよいよ明るくなった。

おおた はるか／神奈川県小田原市生まれ。明治学院大学文学部英文科卒業。1986年『心映えの記』により第1回坪田譲治文学賞受賞。主な著書に『絵の中の人生』（新潮選書）、『恋する手』（講談社）、『明るい方へ』（朝日新聞出版）、『石の花』『時こそ今は』（筑摩書房）。最新作は、『夢さめみれば』（朝日新聞出版）。